

ワイン談義（番外の外）

大森 海太

五年ほど前、いつものゴルフ仲間と寒い日本を避けて台湾に出かけたときのこと。

ガイドブックで知った台南近郊の客家料理の店で、紹興酒は飽きたのでワインを注文したがサッパリ要領を得ない。最近は日本語が通じにくくなったのでカタコト英語で「ワイン、ワイン」と言うものの、相手は「没有」^{スレイク}を繰り返すばかりだ。

そんなはずはないと筆談で「葡萄酒、紅」と書いたところ、ニッコリ笑って「OK、OK」、立派な赤ワインが出てきた。仲間から「よく葡萄という字が書けたな」と褒められたので、「まあね」と得意の鼻をヒクヒク。

振り返ってみると、葡萄酒なるものに親しむようになったのは四〇歳代も半ばのことだったろうか、アメリカ力帰りの上司の影響があった。熱しやすく（醒めやすい）私は、自宅にワイン専用の棚を買ったり、よせばいいのにワイン教室に通ったり。当時の教室はスチュワードেসあがりのお姐さんたちが牛耳っていて、大森くんなどまるで子ども扱い。グラスに入った六種類のワインと答案用紙が目の前に置かれてブラインドテイティングとなる。なにがなんだかよく分からない大森くんはいつも零点だったが、となりの人の答えを盗み見て（カンニング）ごまかしたりした。

その後トシを経るにしたがって、ワインの味も少しは分かってきたような気がして、私個人の好みでいえば、ボルドー系の赤が肉料理に合って飲みやすいように思えた。さらに（Yさんと）超ワイン通のKさんの飲み会が始まったことで、彼が提供してくれる飛び切り極上の銘醸に出会い、これは普段我々が口にする並酒とは全く違うものだと感じた。

コロナが蔓延してからはKさんの会はお休みになり、外で飲む機会も少なくなっただけ家飲みが多くなる。日本酒、焼酎、ワイン、その日の気分によって何でも飲むけれど、さほど中身にこだわらなくなってきた。気持ちよく飲めれば何でもいいや。

でもね、もういちどあの有名シャトーの「大貴族」に拝謁する機会が恋しいな。